芦高新聞

発行所
県立芦屋高等学校
出版部
兵庫県芦屋市宮川町6の3

本校指定店
合資会社 芦屋写真室 撮影部 カメラ部
国鉄芦屋駅北出口前
電話芦屋㉒四七三六番

49年度自治会予算成立

予算大幅増加

去る五月八日の生徒総会において四十八年度クラブ決算承認及び四十九年度クラブ予算承認会が取り行なわれた。本年度の予算は昨年度の二倍という大幅な増加となっている。あいかわらずの騒がしさとゴミの中の生徒総会となった。

騒がしい中で昭和四十八年度決算報告が行なわれた。質問もなくすぐに採決が採られた。千三百六人中、千十八人で文句なく承認された。

次に本年度の予算報告が行なわれた。自治会会費の値上げのため、本年度は昨年度の二倍の予算となった。紙の異常な値上がりの影響で出版部の二倍以上の増加が目だつ。書記局や文化部もやはり二倍の増加である。

クラブ別に見ると文化部では、どのクラブでも一万円以上の増加が見られる。運動部では剣道部が減少しているだけで他のクラブは増加している。特に目立つのは、硬式野球、バスケット、バレーボールである。文化部で同好会になったクラブが四つあるため予備費は十万九千円である。

このあと質疑応答に移った。質問者は一人にかたまってしまい、質問者と議長団とのやりとりだけになりがちだった。出版部と硬式野球部の増加がつかれた。これには、少し反応を見せた自治会員たちもいた。運動部長より、「野球部だけ値上げの申請があった。」とのことだった。また、クラブの態度などで予算の増加や減少を決めているのではないかという意見も出されたた。これはもちろん否定された。

質疑応答が終わり、採決が急がれた。千三百六人中、六百五十五人と、やっと過半数を越えて、予算は承認された。これを学年ごとに承認率を調べてみると、一年が70％、二年が30％、三年が51％という結果だった。このことにより、意見として表には出されなかったが、物価高の中で、不満な予算を与えられたクラブが多いようだった。特に、これからクラブの中心となっていく二年の承認率が30％と過半数に全く足りないことより不満が大きいようだ。三年も過半数をやっと越えた賛成率でしかない。そうすると、この予算は、あまりクラブの状態を知らないで多ければよいとか思っている一年によって承認されているように思われる。これでは、いくら過半数を越えているとはいえ、今年度の予算は全会員によって完全に承認されたとは言えないのではないだろうか。

毎回のことだが、芦高の生徒大会は、しゃべりに来ているのか生徒大会をしているのか、わからない。今回もそのため、後の方は、ほとんど、前でしゃべっている声が聞きとれない状態である。承認者が少ないのは、このためだとも考えられる。それに、皆が立ち去ったあとは、嵐のあとのようにゴミが散らばっている。せっかく、執行部の方で印刷した大事な、決算・予算の報告書なのに、ひどいと思う。自治会員一人一人がもう少し、生徒大会に真剣にとり組むべきである。

昭和49年度予算

	前年度予算	本年度予算
総額	3,884,886	6,816,898
書記局	750,000	1,436,000
書記外局	390,000	630,000
運動部	1,153,000	1,650,000
文化部	770,000	1,314,000
出張費	500,000	800,000
記念祭費	300,000	400,000
予備費	41,886	586,898

昭和48年度決算

	予算額	支出額	残額
書記局	750,000	692,105	57,895
書記外局	370,000	370,000	0
運動部	1,153,000	1,104,400	48,600
文化部	770,000	737,198	32,802
出張費	500,000	496,770	3,230
記念祭費	300,000	238,804	61,196
予備費	41,886	32,498	9,388

「代議員会 ただ今、分議中」？

去る4日自治会決算・予算承認のための代議員会が開かれた。この日図のような「委任状」が使用された。内容は書かれてあるとおりである。みなさんはこれを見てどう思われるか？クラスの代表たる代議員が堂々とこのようなものを使用するのだから面白い。

昨年一度代議員会が大会を前にして定足数を満たせず流会が相継ぎ、ついに大会が中止となったことがある。実はこの委任状はあの苦い経験から代議員長の考えた苦肉の策であった。さて4日の代議員会は委任状も加えてやっとのことで辛うじて定足を満たせた。それからいくつかの質問があって採決、反対者は一人もなくさっと可決、もちろん委任状さんは代議員長の好意あるはからいによって賛成票になった。この間わずかの数分であった。みなさんの手元に本紙が届くまでには長い時間が経っているだろうが、委任状で代議員会に参加した代議員に聞いてみるとよい。「君の委任状は賛成票になったのかね。反対票になったのかね。」──「さあー。たぶん賛成票だろうね。」

委任状によって流会せずにすんだと喜ぶべきであろうか。いや、なんと嘆かわしいことであろうか。

この委任状をうまく利用すればごく少数者が代議員会を、そして自治会を振りまわすことが可能である。そのときは自治会は完全に崩壊してしまうのである。この大変に危険な紙きれについて今後代議員の中から問題提起されることがあるだろうか。おそらくはだれ一人として問題にする者は出て来るまい。もはや代議員にとっては代議員会の採決なんぞくそくらえ！である。実は委任状を提出される代議員諸君はたいへんに情け深い方々なのである。サボりの常連たちは「代議員会？知らないね。」見て見ぬふり聞いて聞かぬふり。急がしそうに、クラブへ家へ予備校へ……。芦高のオンボロ代議員会もいよいよである。あとは6月12日の役員選挙に向けていかなる運動が起こるかささやかな期待を持つだけである。

委任状

私は5月4日の代議員会の採決を代議員長に委任し採決後はその決議に従います。

年　組

※これでは代議員長41.27発行のものの写しである。

芦高生活一ケ月

私たち新一年生が芦高に入ってきてもう一ヵ月。高校生活へのおどろきと不安の中にも生活の調子をみいだしてそれぞれ充実した日々を送っているこのごろだ。授業は各教科の先生方の授業の進めかたにようやくなれてきたようだが、中学の授業との差にまだまごついたり、予習、復習の量が多いので困ってしまうときもある。休み時間になると友だちどうし、「ぜんぜんわかんないわ。」とか「あの先生、何をしゃべっているのかわからないわ、どうしよう。」とか言いあっている。移動教室なんかで短かい十分の休み時間だが、みんなだれとでも話していてなごやかな感じだ。まだ同じ中学の人たちの方が話しやすそうだが、だんだんいろいろな人とも友だちになってきている。二日の遠足では、苦しい登りのときは無言で必死に登っていたが、楽な下りでは、皆がしきりに先生方のこと、友だちのこと、クラブのことなどを話していた。いつもわたしたちより一段高いところで授業をしている先生方とも親しく話せて、とてもいい遠足だった。クラブ活動も多くの人が入り始めて、それぞれ活発な活動を始めているようだ。中には運動クラブなどで練習がきついからやめる人の多いクラブや人気のないクラブ、男子をいっしょうけんめい勧誘しているクラブ……といろいろあるが、それぞれ個人々々にあったクラブを見つけ出してそれを続けたいものだ。

ここで一年生の声を聞いてみよう。これは一年生50人に聞いた結果です。

芦高生活一カ月に思うこと。

・無我夢中、ひっしひっしの一ヵ月。
・勉強とかクラブとかがいそがしくてくるいそう。
・高校に入ったら少しは荷物がかるくなるかと思ったら、かるくなるどころかとても重くなった。
・しんどいヮ！
・死にたい！
・目新しいことばかりでおもしろい。
・高校生活って「おれは男だ」のようにもっと楽しいものだと思っていたのにちょっとゲンメツ。
・先生方の中にかわった方がいておもしろい。
・空気が悪い。
・生物講義室のらくがきにがっくりした。
・先生のわるいのにはこまる。
・昼休みがみじかい。
・事務処理をもっとてきぱきとときわよくやってほしい。たとえば教科書など。

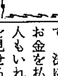
授業に対して思うこと。

・勉強がむずかしい。
・話しの肝心な所をもごもごと口の中で話される先生がおられて「例えば」これは・・で・・となり・・・わかるね？」困っちゃう。
・黒板の字をもっときれいに正確にかいてほしい。
・授業がねむい。
・数学がむずかしい。
・いやな先生がいる。

クラブ活動に思うこと。

・先輩がとても親切だし先輩と後輩の区別がなくてとっても自由で明るくて楽しい。（ギター研）
・早朝練習がねむくてきびしい（コーラス部）
・しんどい。（剣道部）
・きびしい。（水泳部）
等々

と、まあいろいろなことをみんな感じたり、思ったりしている。一年生のあなたはもっと他の意見がありますか？二・三年のあなたは一・二年前のあなたに比べて共通点はありましたか？これから一年生に大いに活躍してほしいと思います。



裏表独語

最近は超能力・ストリーキング・爆弾事件など、話題には事欠かない〇去年からの物価高、上がらなくてもいいものが、どんどん上がって、上がって欲しいものが上がらない〇スプーンを曲げるのも確かにすごい。でも他にもっとする事がないのだろうか。まっすぐな物を曲げられるのであれば、曲がった物だってまっすぐにできるかもしれない。それならば、曲がってヒネた精神をまっすぐにできないだろうか。止まった時計が動きだすのであれば、動きの鈍くなった頭の歯車を、動かす事はできないのだろうか〇アメリカのコロンビア大学では男女学生数千人が、ニクソンに対して〃我々がこうして裸になっているように、貴方も裸になって（正直にという意）真実を述べよ〃と抗議した。ストリーキングという行為で…。ウォーター事件が未だあとをひいている。日本では大学生四人が、ストリーキングをやって、法にひっかかり罰金。お金を払ってでも裸を見る人もいれば、金を払って裸を見せる人もいる。単に目立ちたいだけならば、もっと頭ののいいやり方を考えるべき。裸で走りたいのならば、風呂あがりにでも、家のなかを走ればよろしい〇モナリザの瞳は、どの方向から見ても見る人の側の方に向いているとか。ホント？彼女は確かにどこかを見ているのだが、焦点がない。向けられているまなざしは、向けられていない方に向いている。結局どこもみていないことになる。精神的にモナリザの目を持つ人、芦高には多いようだ。

新任紹介

乾　征夫

・年令　三〇才
・担当科目　社会科
・抱負　生徒諸君と人間としての交わりを持ちつつ、勉学クラブをやりたい。
・趣味、美術鑑賞
・特技　特になし
・性格　一見軟派風。よく見ると硬派。明朗活発。寂しがりや。

今井　誠

・年令　三十六才
・担当科目　一年　基礎理科（物化）　二年　地学　（化学・伴野先生の後釜として赴任）
・抱負　芦高の伝統とは何か。これを理解して、よりよき芦高の一員に仲間入りさせていただきたい。授業では「かけがえのない命とかけがえのない地球を守る立場」で、みんなに満足してもらえる授業を目指したい。
・趣味　山奥の川づり。ボンコツ自動車のあちこちをさわって調子を狂わせること
・特技　卓球を少しばかり
・性格　単純な性格だと思っている。

大西　繁三

・年令　不詳
・担当科目　数学
・抱負　芦高のみなさんと仲よくやっていきたいと思っています。
・趣味　ボーとすること。
・特技　計算間違いをすること。
・性格　考えているとわからなくなった。

新開　裕一

・年令　二十四才（S24・7・25）
・担当科目　社会科地理
・趣味　汽車に揺られて、ぶらりと出かけるのがいい。ディスカバージャパンという気はさらさらなく、ただ何も考えずに遠くへ行くのが好き。「窓から投げられ蜜柑」に出会いたくて。
・特技　全然ないが強いて捜すと東南アジアへのものすごいあこがれがあり、幻想は気づく前に打ち破るべきであろうが、そこは私のユートピアである。ある機会があって、インドネシア語をほんの少しやったので、プラバイニ、サヤマウコピ程度のインドネシア語が出来るくらいであろう。
・抱負と性格　少々あわて者であるが、人のいい（裏をかえせば？）人間である。純情そうに見えるかもしれないが、それは本当である。そして心の中では川筋根性が流れている。本高で楽しくやって行こうと思っていますので、よろしく。

又江　啓恵

・担当科目　国語
・抱負　自由・自治・自律を標榜する芦高との出会いを大切にし、対話のある世界を拡げていきたい。
・趣味　茶華道
・特技　別になし。
・性格　のんびりや。

浅堀　昌子

・年令　皆皆さんの判断にまかせます。
・担当科目　英語
・抱負　皆さんの一人一人が、授業中に学んだことを基にして、いろいろな方向に自分を伸ばしていけるように工夫してみたいと思います。
・趣味　音楽
・特技　なし
・性格　よく人から末っ子と間違われるくらい甘えん坊です。

石井　和視

・年令　二十三才
・担当科目　基礎理科
・抱負　新しい環境の下で芦屋高の若い諸君と共に、勉強できることをうれしく思っている。これからの生活の中で一人でも多くの諸君とふれあい、お互いに、より充実した日々を過ごせることを望んでいる。
・趣味　レコード鑑賞
・特技　特に取りたてて言うほどのものはない。
・性格　とかく自分の性格は自分自身ではわかりにくいものですが、私としては、人間味がある方だと思っています。あとは諸君の観察に任せます。何か悪い点があったら、どしどし指摘して下さい。

上野　良子

・年令　二十六才
・担当科目　体育
・抱負　若者と接して、いつまでも若くありたいと願っている。・高校生の諸君と大いに無駄話をしたいと思う。
・趣味　育児。他に、食べて飲み一日中寝ている事が好きであり、その反面、一日中掃除をしていることも好きである。
・特技　おいしい物を満腹になるまで食べられること。それから夫を自分の思いどうりに操縦できること。
・性格　浮気ぽく左や右に気が移り、いつも精神的浮気をしている。物事について、深く考えることは苦手で、そのうち良い事があるだろうと、いつも安易に考えてしまう。その日、その日を楽しく自分で納得がゆくように生きてゆきたいと考えている。

内田　聖二

内田聖二。どの"セイ"かと問われると"聖人"の"聖"と答えることにしている。名前負けしていると言われるが、本人もそう思っているので間違いない。当年25才。純粋の道産子であるが、少年時代、病気がちで好きな野球も入部に反対される始末。その後、ひたすら遊びに徹したかいがあって人一倍丈夫な体となり、大学に入って念願のボールを握る。が、不幸はそのとき起った。イレギュラーのときイレギュラーしたボールと衝突し、それ以来頭の回転が常にイレギュラーとなる。その影響か、嫌いであったはずの英語を教えているが、英語の苦手な人にも興味の湧くような授業にしていきたいと思っている。釣りが好きだが、誰もいない北の海に比べ、魚より人の方が多いこちらの釣りは性に合わない。性格は北海道型で、ユリ・ゲラーのような特筆すべき特技はない。

竹田　みどり

名前は、竹田みどりと極めて平凡。年令不詳。但し誕生日は七月十一日。

担当科目は、一年は現代国語並びに古典。

抱負というほど大袈裟なものではないけれど、教材を勉強することを通して、諸君たちの中に、また私自身の中にも、何か物に対する新しい見方なり考え方が生じてくる切っ掛けを作れたら、と思っております。

趣味は旅行。大旅行も好きだけれど、気の向いた時に、ふらりと着の身着の儘で出掛ける小旅行。それから料理。おいしいものを食べるための研究工夫には労を惜しみません。誰か試食なさいませんか。

特技は名前、電話番号を覚えないこと。

以上の事柄からわかるように、かなり身勝手で計画性に乏しい性格でありますが、本人はいたって気が弱いところがあると自覚しております。

（おわび）

紙面の都合で先生方の写真を載せることができませんでした。

「アー助かった。」と心の中で思うのは、はたして先生方でしょうか、それとも？

あしやめぐり　(8)

六甲山の石宝殿

地名という物は、初めは日常生活の必要から具体的に実用的に付けられるものだ。古代、今日の大阪あたりが日本の中心であった頃、そこの人達は、毎日、海のかなたに眺められる土地—今の西宮・芦屋・神戸の山河を、海のムコウの里・ムコウの山・ムコウの川と呼んでいた。

さて漢字が伝来した時、我々の祖先はその文字を用いて日本語を表記する方法を考え、音に字を当てる万葉仮名の用法などを発明した。土地の呼び名にも漢字が当てられた。この「ムコ」には務古・武庫の字が当てられた。少し後には六甲（ムコ）の字も使われ、それがいつしか「ロッコウ」と読み誤まられた。武庫川・六甲山・古の務古の泊など、皆こうして生まれた地名なのである。しかし時の移ろうに従って、地名のこのような意味は忘れられ逆にその文字の持つ感覚から地名を説明する伝説がかもし出されてゆく。江戸時代になると、六甲山というのは、昔、神功皇后が三韓征伐からの帰途、この山に六つの甲を埋めたのでこの名がある、とほとんどの書物は解説している。

ところで、この六甲の山の上に、今、石宝殿（いしのほうでん）と称される大きな石造の祠（ほこら）がある。宝殿ゲイトまで登って芦有道路を出、六甲山最高峰に向って二〇分も歩いた六甲山塊東端の最高所に鎮座しているこの石宝殿は、現在ではむしろ山歩きする人々に目標地点として知られているが、古来、山麓の村人の信仰を集め・伝説にも富む庶民の歴史の跡である。これは、誰がいつ、何を祈って祀ったものであろうか。

言い伝えによると、この石祠には三韓征伐のあと神功皇后が韓から持ち帰った神の石を納めてある、と言い、またこの石宝殿わきの三ツ葉ウツギの根もとには皇后が黄金の鶏を埋めた。そのため毎年、正月の元日に、その鶏の鳴声がまだ明けやらぬ六甲の峰々に響き渡るとも伝えている。更にこの石宝殿こそ神功皇后の廟だとすら言う。勿論、これらは伝説であって、即、歴史的事実と信ずることはできない。

文献を調べてみると、享保一九年（一七三四）の地誌『摂津志』が「武庫山在ニ(武庫)郡西北一跨ニ有馬莵原二郡二一名六甲山山頂有ニ小祠一隷ニ西宮二」と、六甲山上に小祠が存在し、それが西宮に属している事実を明記している。一方、山上に現存する祠の石の扉には慶長十八年九月に西宮神社の氏子が、この石宝殿を建立したとの刻銘がかすかに読み取れる。ちなみに、このように慶長以前の年号を刻んだ石の祠は、極めて例が少なく、芦屋市津知町の日吉神社境内の永正十七年（一五二〇）の石祠と共にこれは県下で最も古い遺品の一つである。

六甲山上の石宝殿の地はしかし、石祠の建立より以前から霊場視されていたと思われる。ここの伝説には神功皇后の他に、しばしば山伏が登場し、かつて六甲山上には八十八の社（やしろ）が有って神々はその中心、石宝殿から四方の高山に修行に出た、と伝え、三田地方では六甲山に居る天狗の伝説も多い。また石の宝殿の祭神、菊理媛命は、北陸の山岳信仰の中心である白山の神と同じである。そこでおそらく、古く白山系の修験道の行者によって開かれた行場だと、私は考えている。では何故、そこに西宮の氏子が石宝殿を築いたのか。

中世末に六甲山麓の村人は開墾を進め薪を集めて積極的に山に分け入った。村と村の間で、山地の所有をめぐって争いがくり返された。芦屋・本庄（東灘区東部）・社家（西宮）の地方の人々の山論は多くの史料を今に遺している。当時いち早く東南から六甲山に入った社家郷の人々は、山上にこの霊場を見つけてそこに自分達の氏神の末社を祀った。この人々の手で現存する石宝殿は建立された。しかし後に、この地は西宮から遠すぎるために石宝殿の神様の分霊が西宮神社へと持ち帰られた。それが今、西宮神社境内にあって、菊理姫命を祭る六甲山神社である。

一方、江戸時代に入ると、この石宝殿は麓の村人からまた違った信仰の対象とされ始めた。雨乞いの神として崇拝されだしたのだ。これは、石宝殿が船坂川・仁川・芦屋川・住吉川などを潤おす主要河川の分水嶺上に坐すためだと思われる。しかも古老の伝えによると、そこに興味ぶかい雨乞いの風習が存在していた。

東灘区本山町小路（しょうじ）は、昔から「小路小石の小村やけんど、娘育ちのよいところ」と唄われた小石と竹やぶの多い村だった。この村人は早魃の時には遠々石宝殿に登り、雨乞いの呪文と般若心経を唱えて一晩そこに籠る。夜が明けても雨が降らねば、彼らは石宝殿の南の谷に降りてそこでサワガニを捕え、それを石宝殿に投げつけて帰った。すると神様が怒って人々が村に帰着せぬまに、ザーと雨が降ると信ぜられた。

この村の西、国鉄摂津本山駅の東は昔、田辺村と言った。ここの村人は、ひどい日照が続くと、畑で雄と雌の雨蛙を捕えて石宝殿へと登った。小路の人達と同様にお籠りをして、それでも降雨をみなければ、人々は持って来た雨蛙を宝殿の石の祠にこすりつけ、ぬりつぶして村へ帰ったと言う。この石宝殿に対する同様な風習は、六甲をとりまく周辺の麓の村々で伝えられていた。神戸市兵庫区の唐櫃（からと）、宝塚市、西宮市の船坂・上ケ原・越木岩などの村々から村人は、ここに雨乞いに登ったのである。

文化三年（一八〇六）のある古文書は言う、「炎暑之節庄内は不及申、四国辺又ハ隣国より六甲山上之権現え昼夜之差別なく為請雨之参籠仕……」と。

長い歴史の中で様々に信仰を集めて来た石宝殿から、阪神間の遠望はすばらしい。しかし、そこから見える空の色は、今、澄んでいない。あまつさえ、この石宝殿の地下深く、新幹線の列車は轟音を響かせて大地をゆるがし、雨乞いの風習も日毎に忘れられようとしている。

（田辺　眞人）

アンチ『可能性』の思想

「若い者たちには限りない可能性があるのだ。」というような意味の言葉をおとなはよく口にするものだが、果たして現実にそうなのだろうか。はっきり言って私は『可能性』とか『無限』といった種類の言葉があまり好きでないし、当然なるべくなら使いたくないとも考えている。大人の人達には今述べた言葉はふさわしくないに違いないとしても若いから無限の可能性を秘めているという訳でもないのだ。ひとりひとりが個性を携えているように才能、それに伴う可能性も自ずから異っているのである。だから誰にでも等量の可能性が約束されているかのように思い込むのは間違いのもとだ。可能性は安売りされるべきものではない。将来の夢を実現させようとする場合には可能性などというシロモノは努力だけによって満たされはしない、ということを覚えておきたい。要するに早い話が『出世』だの『成功』だのという類りない嬰をつかむようなコトバからは、できるだけ早い時期に脱却してしまった方がうまいやり方と言えるに違いないと私は考える。

初めから物事に期待していなかった場合には失望の度合がかなり少なくて済む。優越感に浸っているさにその時、薄っぺらな硝子細工が砕け散るような些細な出来事によって自分を見失ってしまうくらいなら、もとより七十五%の劣等感の中で過ごす方がよほど残酷な結果に陥る羽目に会わずに済むし、また安全度も驚くほど高いはずだ。

さて私は「大人には可能性という言葉は似つかわしくない。」とすでに述べた訳だけれども必ずしもそのように決められた訳ではないようだ。私が見聞きした例えば今日『素朴画家』と呼ばれているアンドレ＝ボーシャンは四十六才で初めて絵筆をとったし、さらにピエル＝ロアとなれば五十才を過ぎて『新進画家』と言われたそうだ。

可能性は『みこみ』であって、ここに掲げた二人の画家は異例であって、年齢が増すほど普通は実現する割合も減少していくものだ。

（文芸部）